

「ラブエネルギー」

— 2稿 —

2023/7/29

石川

〈人物表〉

林 一郎 (16) 1年A組

北村 マサル (16) 1年A組・林の友人

松井 みなみ (16) 1年A組

その他

ログライン

目立ちたくない林は、みなみへの恋心がバレて、クラスの注目の的になってしまう。

ねらい

恋心がバレたくない心理、心のコントロールを失っている様で笑ってほしい。

1. 林家・一郎の部屋（朝）

静まりかえった部屋。

林一郎（16）、ベッドに寝そべり、浮かない表情で天井を見つめている。

ドアがノックされる。

母の声「一郎、はやく起きなさい」

一郎、返事しない。

ドアが開いて母が入ってくる。

母「はやくしないと遅刻するわよ」

一郎、少し起き上がりしんどそうな表情で、

一郎「頭痛いから休む」

母「あんた水曜はいつもそうじゃない。理由を言いなさいよ」

一郎「……」

母「黙ってたらわかんないでしょ」

一郎「……今日は休みたいんだよ」

母「じゃあお父さんに説明してね。自分で。母さんは知らないから」

一郎「わかったよ。行くよ」

と、ダルそうに起き上がり、机の上にある教科書などを鞆に入れ始める。

2. 東泉高校・1年A組教室（朝）

朝のホームルームの時間。一郎は窓際の席。

教卓では担任が連絡事項を読み上げている。

一郎は退屈そうに聞き流している。

担任「それから美化委員。えー美化委員は、松井」

一瞬にして一郎の顔が強張る。

担任「松井はどこに座ってる〜?」

一郎、視線を下に落とす。

遠くの席で「はい」と返事する声。松井みなみ（1

6）である。

担任の声「昼休み理科室に行ってください。美化委員の集まりが

あるみたいです」

みなみの声「わかりました」

担任の声 「ではホームルームは以上です」
チャイムが鳴る。
一郎、顔を上げることができない。

3. 東泉高校・廊下〜美術室（朝）

移動教室へ向かう1年A組の生徒達。

一郎と北村マサル（16）、並んで歩いている。

その前を歩くのはみなみと女子生徒。

一郎、みなみに注意をとられている。

北村 「お前明日の発表の準備もうやった？」

一郎、気付かない。

北村 「なあ」

一郎 「え？」

北村 「だから発表のスライドつくったのかって」

一郎 「ああ、つくったよ」

北村 「結構ちゃんと調べた？」

一郎 「それなりに」

北村 「俺の後にお前がすごい発表したら俺だけ悪目立ちするだろ〜バランスとれよ」

一郎 「それはお前が悪い」

一郎、みなみに気をとられる。

美術室が見えてくる。

北村 「1時間目から美術ってのは楽だけどさ、俺一番前の席だから先生と頻繁に目が合っただ嫌なんだよな。お前席どこだっけ」

一郎 「結構後ろの方」

北村 「いいよなく隣は？」

一郎 「！」

一郎、みなみが会話中なのを確認し、

一郎 「（ボソッと）松井、さん」

北村 「誰だって？」

一郎 「誰でもいいだろ」

北村 「なんだそりゃ。隣は誰なんだよ」

一郎、みなみを気にして、

一郎 「だから松井、さんだよ」

北村 「あー松井さんか。なんで一回隠したんだ？」

一郎、みなみが気になる。

一郎 「別に。お前こそしつこいぞ。もしかしてす、好きなのか」

北村 「はあ？ なんでそうなるんだよ。いや俺の隣がああ馬場

だからお前の隣が気になっただけだよ」

一郎、みなみを気にして、

一郎 「別に馬場さんでもいいだろ」

北村 「さんってなんだよ。気持ち悪い。お前馬場のこと好きなの

のか」

一郎、みなみを確認してから、

一郎 「お前はアホだ」

4. 東泉高校・美術室（朝）

続々と入ってくる1年A組の生徒たち。

座席は一人用の机がひっついてペアになっている。

一郎、自分の席に向かい、静かに座る。

一郎 「……」

と、前方からみなみが来るのが見える。

身構える一郎。

みなみ、やって来て一郎の隣に座る。

一郎、俯いてじっと机を見ている。

みなみの声 「おはよう」

一郎 「！（振り向いて）おは……」

みなみ、向かいの席の女子生徒と話している。

一郎、横目で周囲を見渡した後、俯いてまた机を見

る。

5. 林家・一郎の部屋（夜）

数学のプリントに取り組み一郎。手が止まっている。

一郎、問題ではなく目の前の壁を見つめている。

一郎 「……」

一郎、我に返り、問題に取り組む。

が、貧乏揺すりを始める。

とうとうペンを放り投げてしまう。

6. 東泉高校・1年A組教室（昼）

地理の授業中。教卓には北村。スクリーンにはパワーポイントのスライドが映っていて、生徒たちが見ている。少し離れたところに地理教師がいる。一郎も見守る。

北村 「僕が調べた世界の地形はエベレストです。エベレストは標高……」

× × ×

地理教師 「北村くん、ありがとうございます」

北村、席に戻る。

一郎、USBを持って席を立ち、教卓へ向かう。

× × ×

一郎 「以上がウユニ塩湖の紹介となります。ありがとうございます
ました」

間。

地理教師 「（促して）では質問ある人は
手は挙がらない。」

地理教師 「質問ないですか？」

一郎 「……」

地理教師 「では今日は30日なので……」

一郎 「！」

地理教師 「出席番号30番は、松井さん。松井さんいますか？」
一郎、顔が強張る。

みなみの声 「はい」

前の方に座っている女子生徒2人が一郎を見て何やら話している。

一郎、それを見て、小さく息を整える。

地理教師 「何か質問してください」

みなみ 「はい」

と、立ち上がる。

一郎、みなみの方へ顔を向けることができない。

みなみ 「えーっと」

一郎、女子生徒2人をチラリと確認する。
女子生徒2人はニヤけている。

一郎、みなみの方へ少し顔を向ける。

みなみ「結構調べたのかなと思ったんですけど、林くんはこのウ
ユニ塩湖が好きなんですか？」

一郎「……え？」

みなみ「あ、いや単純に好きなのかなって」

一郎、視線を落とす。

ニヤニヤする女子生徒2人。

他の生徒の視線も一郎に集まる。

一郎「……」

一郎、聞き取れない勢いで、

一郎「好きじゃなでっ」

みなみ「へ？」

クラス中の視線が一郎に集まっている。

一郎、下を向いたまま、

一郎「あの、好きじゃないです」

みなみ「わかりました。ありがとうございます」

と、座る。

一郎、顔を上げることができない。

地理教師「林くんありがとうございました」

一郎、USBを抜き、力なく席へ向かう。

クラスのうちこちらからヒソヒソ声がする。

(終わり)